



## 四旬節第 1 主日 (ルカ 4:1-13)

イエスに信頼する人に悪魔の誘惑は何もできない

「イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒れ野の中を“霊”によって引き回され、四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。」(4・1-2) 誘惑を受けるイエスの置かれている状況がここに描かれています。「聖霊に満ちてヨルダン川からお帰りになった」イエスが「悪魔から誘惑を受けられた」この点について考えてみたいと思います。

10日(水)は四旬節が始まる「灰の水曜日」でした。浜串教会で灰の式を行い、小学生も来てくれました。朝のミサでしたが、ふだんの水曜日に朝のミサに変更しても侍者の子供しか来ないのですが、灰の水曜日には侍者以外の小学生も来ていました。家族の理解と、本人の努力が伝わってきました。

11日(木)建国記念日でしたが、前の週4日(木)に福見の小学生のミサで予告した通り、夕方のミサで灰の式をしました。小学生が1人来ていまして、お一感心感心と褒めました。この子供たちにも、灰の水曜日の習慣が長く長く記憶されたらいいなあと願うばかりです。

イエスは宣教活動に入る前に、荒れ野での体験を通られました。イエスが荒れ野に入られたのは「聖霊に満ちてヨルダン川からお帰りになった」状態でのことでした。悪魔からのどのような誘惑があるにせよ、イエスはたった一人なのではなく、父なる神と共にいて、聖霊に満ち満ちた状態で誘惑と向き合うことができました。

ですからイエスの荒れ野での体験は、わたしたちの教育という面もある出来事です。試みに遭う時どのように向き合ったらよいのかを教えてくださいているのです。あえて悪魔の誘惑に身を置いて、わたしたち人間に、試みに遭う時どのように向き合うべきか、模範を残されたのです。

イエスが受けたとされる3つの誘惑は、イエスの十字架上の出来事を暗示しているように思えます。最初の誘惑である「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ」(4・3)は、「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」(ルカ 23・37)を思い起こさせます。目の前の苦しみから自分を救うために、力を使えばよいではないかと誘惑しているのです。イエスはきっぱりと拒否します。

イエスは石をパンにすることも、十字架から降りることもしませんでした。イエスはこの誘惑を通して、人は苦しみを必ず受けるけれども、苦しみを取り除くために神がおられるのではなく、苦しみに際してわたしたちを支え続けるためにおられることを教えようとします。

苦しみから逃れたい一心でこの世のものに手を出すことは、一時の対処法にはなるかもしれませんが、根本的な対処法ではありません。苦しみの中で片時も離れず神が支え続けてくださることを、パンの誘惑の中でイエスは教えようとするのです。神が支えてくださる中で経験する苦しみは、決して無駄ではありません。むしろ尊いものです。

次に悪魔は、「一切の権力と繁栄」をちらつかせて、自分を拝むことを要求しました。この世での権力と繁栄の象徴は金銭でしょう。ユダはこの世での権力と繁栄の象徴である金銭を受け取って、イエスを引き渡し、イエスは十字架にかけられることとなります。

ユダはもしかしたらイエスが最終的には十字架から逃れる方法を思いつくだろうと高をくくっていたのかもしれませんが。けれどもイエスは権力と繁栄の誘惑を退けて、十字架に磔になったのでした。

悪魔の2度目の誘惑も、イエスははねのけました。イエスは権力と繁栄を手にして、人に仕えられるためにおいでになったのではなく、仕えるためにおいでになりました。十字架を降りなかったのも、御自分の命を与えるために、あえて降りようとされなかったのです。

権力と繁栄の誘惑は、神がいつもそばにいてくださることを忘れさせてしまいます。「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ。」（申命記 6・13）神がわたしたちから離れてしまったら、権力と繁栄はむなしと教えているのです。

最後に悪魔は、「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ」（4・9）と挑みます。十字架の場面、議員たちのあざけりを思い出します。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」（ルカ 23・35）

十字架から飛び降りるなら、議員たちのあざけりを黙らせることができたでしょう。けれどもイエスは、すべての人々を罪の束縛から解放するために、御父の計画に従順に従うことを選びました。人生の中で生じるあらゆる苦しみを引き受ける力を、イエスは最後の誘惑の場面で示してくださるのです。

イエスが荒れ野での誘惑を退けて示してくださる模範は、イエスの十字架の場面の象徴であり、わたしたちの死を覚悟させるような苦しみの場面で神がそばにいて支えてくださるという約束でもあります。

だからこそ、イエスに従おうとするわたしたちは、苦しみを逃れたい一心でこの世の誘惑に手を出すことをしません。権力と繁栄に心を売り渡したりしません。苦しみから逃れようと人生を投げ出したりしません。イエスが聖霊に満たされて荒れ野での試みを退けたように、誘惑の時に神はそばで支え続けてくださいます。

「悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。」（4・13）悪魔のあらゆる誘惑が無駄であったことが印象的です。誘惑は避けられないとしても、神がそばにいてくださると信頼して日々を歩み続けましょう。神がそばにいてくださるなら、わたしたちにも悪魔の誘惑は無駄に終わるのです。